

令和6年度第2回岐阜県薬剤師確保対策推進協議会 議事要旨

日時：令和6年11月21日（木）9：30～11：00

場所：OKBふれあい会館 407会議室

1 出席者

<委員>

松波 英寿（一般社団法人岐阜県病院協会 代表理事）

棚瀬 友啓（一般社団法人岐阜県薬剤師会 会長）

鈴木 昭夫（岐阜県病院薬剤師会 会長）

定岡 邦夫（岐阜県病院薬剤師会 副会長）

五十里 彰（岐阜薬科大学 副学長）

山岡 一清（岐阜医療科学大学 学長）

<事務局>

居波 慶春（岐阜県健康福祉部薬務水道課 課長）

神谷 武志（同 技術課長補佐兼薬事麻薬係長）

今井 紗絵子（同 技術主査）

2 議事内容

(1) 令和6年度実施事業について

- ・事務局から資料1に基づき、令和6年度実施事業について説明。

(委員)

薬学生合同インターンシップの参加者数について、対象が全国の薬学生であるところ12人しか募集しないというのはとても少なく感じる。交通費の補助など事業の都合でこの人数というのは仕方がないが、本来であれば参加希望にはすべて応えられると良いと思う。

また、合同企業説明会での資料配布については医師でも同様の取組みをしているが、対象者へ配るのと大学に配置するのでは効果がかなり違う。

(事務局)

資料については合同企業説明会チラシと合わせて受け入れ窓口の一覧を配布する予定である。

インターンシップについては今年度初めて実施する事業のため、どの程度の応募があるかも含め手探りの状況。加えて受け入れ側の施設の体制もあるため、今年度はこの人数での実施を予定している。今後応募数が多くなるようであれば、事業内容を検討していく。

(委員)

インターンシップが2日間の日程だが、宿泊先について受入施設の近辺で確保することも一つの方法であるので、次回以降検討いただきたい。

また、未就業者対策事業について、講義動画のオンデマンド配信とあるが、受講確認をとる方式であれば希望就職先へ情報提供等もでき、採用活動がスムーズになると考えられる。

(委員)

インターンシップの対象学年について、薬学生向けアンケートにて1年生から就職先を考えていくという結果があったと思うが、3～5年生だけではなく、1年生から対象とした方が良いと思われる。

(委員)

1年生と5年生が参加した場合に同じ話をしても良いのかということや、多くの参加者を受け入れられないこともあり、ある程度内容が分かる学年に病院業務等の魅力や病院と薬局の連携といった地域医療を学んでほしいというねらいがある。

(2) 薬学生向けアンケート結果について

- ・事務局から資料2に基づき薬学生向けアンケートの結果について説明。

(委員)

学生は夜勤や当直を嫌がる傾向があるか。

(委員)

学生に話を聞くと、イメージが先行しているように思う。

中小規模の病院だと思うが、入職して半年で夜勤を1人で任せられるため、責任を負うのが怖いといった話を聞く。

(事務局)

アンケート結果でも学年が上がっていくごとに病院を志望する割合が下がっている傾向がある。

(委員)

大学の先輩や実際に働いている者の話を聞く機会が増えるのだと思う。大変だという話の中でも自分なりの面白みを探せるといいが、ネガティブな面ばかりを見てしまうのだろう。

(委員)

初任給の低さという話が出るが、後々薬局薬剤師の給与と病院薬剤師の給与は逆転するところがある。生涯年収で考えれば決して給与が低いということではないのだが、奨学金を借りている場合はその返済があるばかり初任給額を見てしまうという話を聞く。

(委員)

当大学は1，2年生に給与が逆転していく話をしているが、学生には響かない。初任給を多く貰い、その後転職するという話を聞く。

(委員)

当大学でも概ね50代で逆転することを学生へデータ見せて説明しているが、学生は生涯同じ場所で働き続けるという考えがないため、病院へ意識が向かないのかもしれない。

(委員)

このアンケート結果では奨学金の金額について300万円以上と答えた学生が一番多く、厚労省が実施した調査の薬学5・6年生へのアンケートでは平均返済額が650万円といった結果だったが、大学の先生方の肌感覚ではどうか。

(委員)

授業料だけでも高額になるため、300万円以上借りている学生は多いと思う。

(委員)

学生と話をする、アルバイトで賄えない部分を奨学金で補完しているとのことだった。よく聞くのは月額5万円前後なので6年間だと360万円。ただ、家庭状況から授業料の援助がない学生もいるため、そういった場合はより高額になるだろう。

(3) 病院等状況調査結果について

- ・事務局から資料3に基づき、病院等状況調査の結果について説明。

(委員)

薬剤師の仕事は対物業務から対人業務へとシフトしており、チーム医療や病棟業務にやりがいをもって就業する薬剤師もいる。

単純に調剤業務をする人手として出向するのでは、出向する薬剤師もやりがいを感じられず、嫌になってしまうだろう。

薬剤師がチーム医療の一員として参加・機能をするために出向するのだということを、病院の経営側も含めて理解を得たうえで、体制整備を支援していく必要がある。

今回、修学資金支援制度がある病院が多くあることを知ったが、それでも薬剤師が来ないということは、病院自体が魅力を出していないと難しいのだと思う。

(委員)

当院では各病棟に薬剤師を1人配置しており、調剤業務は機械で行ったうえ薬剤師はチェックのみであるため、対人業務が90%以上となっている。そこに面白みを感じて薬剤師が就業するのだろう。

しかし、小規模の病院が同様のことを行うのは困難なため、人的支援の前に自動

分包機など設備的な支援を行えば、出向した薬剤師も病棟業務に専念でき、新たな取り組みもできるのではないかと思う。

(委員)

薬学生が就職活動をするとき、どの病院が募集をしているのか分かりにくいいため、県内のどの病院が募集をしているのか一覧化できれば良いのではないか。調査結果から薬学生へのアプローチ方法が分からないという意見があったが、逆に薬学生からアプローチしやすくするのも手ではないかと思う。

(事務局)

薬学生へのアンケートにも病院の採用情報に接することがないという意見もあったため、作成時期や形式について県病院薬剤師会と調整のうえ作成し、ホームページ上に掲載する等考えていきたい。

(4) 令和7年度以降に取り組む対策について【薬剤師修学資金返還支援制度】

・事務局から資料4に基づき、薬剤師修学資金支援制度の事業案について説明。

(委員)

支援期間の1.5倍以上の期間就業した後に就業先の病院に定着させるための方策があれば学生に話をしたい。

(委員)

就業期間中に病院としてチーム医療等の魅力を与え、この病院で働きたいと思っただけなのが1番かと思う。

(事務局)

事業案について、案②が他県の事例としては多いが、案①のやり方もあり、どちらかの方法での実施を考えている。

案①は既に自助努力として奨学金返還支援制度を作っている病院を排除しないという点、病院としても支援制度を作り薬剤師確保に取り組んでいただくという点から、単に県が補助を行うということよりも、案①の方が各方面に理解が得られやすいのではないかと考えている。

(委員)

薬剤師が入らなくて当然という考えが経営者側にあり、能動的に動かない施設も多くあると思うが、このような制度を利用して病院の資質を向上していくという部分も含め病院全体で動くという姿勢を作っていくためにも案①が良いのではないかと思う。

(委員)

病院自体にも考えていただく必要があるため、案①で良いのではないかと思う。

(委員)

どちらかということであれば、案①で良いのではないかと思う。

薬学生アンケートの結果では、愛知県出身の学生が一定数いるが、その大部分は愛知県に就職してしまうため、愛知県への流出を止めないといけないと考える。

医学部にもある地域枠というものを両大学も検討できないか。

(委員)

高校から愛知県の大学へ行かせないのが岐阜県に定住する1番の方法でないかと考える。

(委員)

本学においては、いかに薬剤師が不足している地域から学生に来てもらい、その地域に卒業生を輩出するかについて議論しているところ。

愛知県出身の学生の話では、愛知県の中でも名古屋市に集中する傾向があり、知多半島等の病院は学生に避けられている。理由としては生活のしやすさがあり、病院の業務内容等が良くても生活がしにくい地域は避けられる印象がある。